

タンゴギターアンサンブル交流会

= TANGO埼玉2018 =

日時 2018年8月11日(土)13:30 (開場 13:15)

場所 埼玉県桶川市 響の森市民ホール/プチホール(1階)

演奏 Tango 03、千葉ギターアンサンブル(CGЕ)、ロス・ボニートス

プログラム

〈第1部〉	ロス・ボニートス	(1) Lágrimas y sonrisas(涙と笑い)	パスクアル・デ・ゲージョ
		(2) Fumando espero(君を待つ間に)	ファン・ピラドマット・マサナス
		(3) Re fa si(レ・ファ・シ)	エンリケ・デルフィーノ
		(4) Organito de la tarde(黄昏のオルガニート)	カスティージョ兄弟
Tango03	(5) El amanecer(夜明け)	ロベルト・フィルボ	
	(6) Alma de bohemio(ボヘミアンの魂)	ロベルト・フィルボ	
	(7) A media luz(淡き光に)	エドガルド・ドナート	
CGE	(8) Alfonsina y el mar(アルフォンシーナと海)	アリエル・ラミレス	
	(9) Tomo y obligo(交わす盃)	カルロス・ガルデル	
	(10) Melodía de arrabal(場末のメロディ)	カルロス・ガルデル	
	(11) A su memoria(母の思い出に)	アントニオ・スレダ	
	(12) Adiós Buenos Aires(さらば、ブエノスアイレス)	ロドルフォ・シャーマレーラ	

休憩

〈第2部〉	ロス・ボニートス	(13) La vi liegar(やってきた女)	E.M.フランチーニ
		(14) Ole guapa(オレ・グアパ)	マランド
		(15) 赤い靴のタンゴ	古賀政男
		(16) Tango nocturno(夜のタンゴ)	オットー・ボルグマン
Tango03	(17) Nostalgias(郷愁)	ファン・カルロス・コビアン	
	(18) Triunfal(勝利)	アストル・ピアソラ	
	(19) Nuestro balance(ヌエストロ バランセ)	チコ・ノバーロ	
CGE	(20) Yo no sé qué me han hecho tus ojos(君の瞳に魅せられて)	フランシスコ・カナロ	
	(21) Silueta porteña(ブエノスアイレスの影法師)	クッカーロ兄弟	
	(22) En esta tarde gris(灰色の屋下がりに)	マリアーノ・モーレス	
	(23) Ensueño(夢の中で)	アントニオ・スレダ	
	(24) Esta noche me emborracho(今宵われ酔いしれて)	エンリケ・サントス・ディセポロ	

「TANGO 埼玉 2018」演奏曲紹介

(1)ラグリマス・イ・ソンリサス(涙と笑い)

バルス・クリオージョの傑作。タイトル通り短調と長調によって〈涙〉と〈笑い〉との対比が描かれている。全体的にバルス特有の甘く美しく哀しいメロディで貫かれ、聴くものを一度で魅了する。

(2)フマンド・エスペロ(君を待つ間に)

1920年代初めにバルセロナ(スペイン)小劇場で初演。メロディーや歌詞はクブレ(スペイン歌謡)そのもの。その後アルゼンチンに紹介され大ヒット。「煙草は無上の快楽。あなたの口の煙を下さい。人を酔わせる煙草の熱が私の愛に火をつける…。愛煙家はたまらない曲である。

(3)レ・ファ・シ

作曲者デルフィーノはある早朝、出演を終えて帰宅の途中に曲想を得た。忘れないように書き留めておこうとしたが、鉛筆は持っていたが紙がない。そこでそこの家の壁に書いておき、あとで行って見たら、その上に選挙のポスターが貼られていた。はがそうとしているところを巡査に見とがめられ…というエピソードが伝わっている。

(4)オルガニート・デ・ラ・タルデス(黄昏のオルガニート)

オルガニートは街を流して歩く、手回しハンドルのついた小型オルガンで、1900年代の下町の風物だった。歌詞は、老人と助手の若者が、恋人(老人の娘でもある)と、恋仇を探して、下町をさまよっているのだという。

(5)エル・アマネセール(夜明け)

早朝のブエノスアイレスの情景を古典的3部構成で奏でる魅力あふれる名曲。酔って家路につく遊び疲れた人たち、早起きして働きに出てくる元気な労働者たち、といった都会の朝の風景である。ご存知 Tango03のテーマ曲。

(6)アルマ・デ・ポエミオ(ポヘミアンの魂)

1914年、アルヘンティーノ劇場で上演された同名の劇中で作曲者の楽団が初演。当時のタンゴの枠を超えた、オペラ音楽風の劇的な曲想を持ち、これによってフィルポは最高の作曲家という評価を獲得した。

(7)ア・メディア・ルス(淡き光に)

歌詞の一番に「コリンエンテス通り 348番」、二番は「フンカル局 1224番」と、住所、電話番号から始まるシャレたもので、一番はブエノスアイレスの下町の歓楽通り、二番はブエノスアイレスの高級住宅街の一室で客を相手にする娼婦の誘いをうたったもの。

(8)アルフォンシーナと海

この曲はアルゼンチンサンバで、今回タンゴにアレンジしたもの。メルセデス・ソーサという女流フォルクローレシンガーが歌って有名になった。この曲のモデルとなったアルフォンシーナ・ストルは、入水自殺をして亡くなった実在の女流詩人で、国際タンゴ協会の理事でもあった。人魚に導かれて海の中へ入ってゆく悲しくも美しい娘の姿を歌っている。

(9)トモ・イ・オプリーゴ(交わす盃)

映画「ブエノスアイレスの灯」で主演のガルデルが歌って有名になる。ガルデル扮する田舎のガウチョのアンセルモは都会に憧れて上京した恋人の後を追う。やがて泥酔して男にもて遊ばれる乱れた恋人の姿を見て愕然とする。アンセルモは自棄酒を飲みながら歌う。“俺も飲むから君も一杯つき合ってくれ今日の苦しい思いを忘れてしまいたいから”

(10)メロディア・デ・アラバル(場末のメロディ)

カルロス・ガルデルが1932年に作曲。パリで撮影された歌手ガルデルの主演映画(同名)の主題歌。タンゴの生まれたブエノスアイレスの下町の情景が描かれている。

(11)ア・ス・メモリア(母の思い出に)

オメロ・マンシ詞“A Su Memoria”(to your Memory)にValsを多く作曲したアントニオ・スレダが曲をつけた。母親の死に直面して、母親との日々を回想しながら、悲嘆にくれる様を歌っている。1931年の作品。

(12)アディオス・ブエノス・アイレス(さらば、ブエノスアイレス)

映画「アディオス・ブエノス・アイレス」の主題歌。オルケスタ・ティピカ・ビクトルの演奏で録音されているが滋味のある

佳曲。「私は懐かしの故郷に別れを告げなければならない。まるで詩人のように、さらば、ブエノスアイレスと…」

(13)ラ・ビ・ジェガール(やってきた女)

1944年、マテ茶会社「パハロ・アスール(青い鳥)」の主催するタンゴ・コンクールで優勝。初演はオランダ・ゴーン二楽団の伴奏でフランシスコ・フィオレンティーノが歌ったもの。「私は見た、彼女がやってくるのを。小さい手の愛撫、雪に痛めつけられたつばめ。ふたりのために嘆くタンゴ…」。

(14)オレ・グァパ

マランドといえば『オレ・グァパ』、『オレ・グァパ』といえばマランドといわれるほどのコンチネンタル・タンゴの名曲。スペイン語で「やあ、きれいな娘さん」という意味。

(15)赤い靴のタンゴ

古賀政男作曲の和製タンゴ、1948年製イギリス映画の「赤い靴」という映画の宣伝用に作られたようです。昭和時代の美貌の歌手として知られている奈良光枝が歌った曲。

(16)夜のタンゴ

1937年作のドイツ映画「夜のタンゴ」の中でポーラ・ネグリが歌い、世界的にヒットしたコンチネンタル・タンゴの名曲。アルフレッド・ハウゼ楽団の演奏でも有名。

(17)ノスタルヒアス(郷愁)

作詞者のエンリケ・カディカモが書いたコメディ「ブエノスアイレスの歌い手」のために作られたが、興行主から「音楽的に複雑すぎて、ポピュラー音楽に反する」として却下されたが、人気歌手チャルロが歌って大好評になる。伝統的な音楽家や歌手からは「これでタンゴなの？」と非難されたが、すぐにアルゼンチンだけでなく国際的な大ヒットになった。

(18)トゥリウンファル(勝利)

タンゴの革命児といわれたピアソラ初期の作曲。最初の導入部からして印象的で、当時としても一気にピアソラに取り付きやすくした曲である。タンゴの30~40年代感覚、クラシック趣味を加えるなどピアソラの古典曲では屈指の名曲。

(19)ヌエストロ バランセ

1960年代に生まれた比較的新しいタンゴで、チコ・ノバロの作詞・作曲で、当時のタンゴのコンクールの優勝曲。題名は直訳すると『僕たちのバランス(結論・決算)』と、何やらわかったようなわからないような題名だが、このまま続けるかやめるかでたどり着いた恋愛関係の終わりの意味。

(20)ジョ・ノ・セ・ケ・メ・アン・エチョ・トウス・オホス(きみの瞳に魅せられて)

フランシスコ・カナロが1931年に作曲したバルス・クリオージョ(アルゼンチンのワルツ)。

2重唱に適した曲。「僕が感じているのは愛情なのか情熱なのか分からない。ただ分かるのは、君にに会わないでいると悩みが心に湧き出て来ること…」と歌います。

(21)シルエータ・ポルテーニャ(ブエノスアイレスの影法師)

初期のタンゴと黒人のリズムから発展した2拍子の“ミロンガ”。「君が歩道に靴音を響かせて歩いて行くとき、いたずらっぽい下町のミロンガのリズムが生まれる…」。ポルテーニャとはスペイン語で「港」であるがここではブエノスアイレスのこと。

(22)エン・エスタ・タルデ・グリス(灰色の昼下がりに)

作曲者(マリアーノ・モーレス)、作詞者(コントウルシ)が同じ女性グリーセルとの悲恋体験から生まれた曲。「来て！私の魂はもうこの孤独に耐えられないと言った君の声が、この灰色の午後に私のもとに帰ってくる…」。

(23)エンスエニョ(夢の中で)

アントニオ・スレダ作曲。「ドス・アモーレス」「ヌンカ」「ボテジェーロ」などのタンゴの作者でもあるが、この曲のように美しいバルス・クリオージョ(アルゼンチンのワルツ)の作者として名高い。

(24)エスタ・ノーチェ・メ・エンボラーチョ(今宵われ酔いしれて)

「ひとり、骨が見えるほどやせこけて、やつれ果てた彼女が、明け方にキャバレーから出てくるのを見た。10年前はおれの気を狂わせるほどの美女だった。その女が、こんな姿になるとは、今夜はおれは酔っぱらう、とことんまで…」。

演奏者のプロフィール

T03 (TANGO 03)

大学時代のギター部の仲間が30数年ぶりに集まって、2003年にアルゼンチンタンゴの”オーサン(王様)にあやかりたい”オッサン”集団として命名され、結成したタンゴアンサンブルです。演奏活動として数々のギターフェスティバルや天満音楽祭、造船屋音楽会等に参加し、また、今回のギターアンサンブル交流会は楽しみにしています。



CGE (千葉ギターアンサンブル)

1974年創立。以来、プロギタリスト小胎剛氏の指導のもと、千葉ギターアンサンブル(略称 CGE)として活動しています。タンゴ、ポピュラー、クラシック、日本の歌など幅広いレパートリーを持ち、千葉市を拠点に年間 20 回近くコンサートを行っています。ギターを通して夢を語ることを、この仲間といつまでも続けたいと願っております。



ロス・ポニートス

2014年2月桶川市の広報でメンバーを募集し結成。
ロス・ポニートス(ロス・アブエロス・ポニートスが正式名称)とはかっこいいおじいちゃんという意味。
タンゴをメインに演奏し自主コンサート、ジョイントコンサート、ボランティア演奏など年間 10 回程度の演奏活動を行っています。

